

令和元年度 金沢ベーシックカリキュラム実践推進事業 報告書

学校名	研究課題	研究手法
長田町小学校	算数	指導的評価

1 研究の重点と具体的な取組

重点1：よくわかろうとする子を育成するための指導的評価

本校において指導的評価を、以下の3つの視点を価値づけることとした。

- ・既習を生かしている
- ・算数用語を使っている
- ・数直線などの図、表、グラフ、式を使っている

価値づけの方法については、言葉がけや板書への位置づけ（色などのレイアウト、○○方式などのネーミング化、マグネットネームの活用）などを行った。

重点2：考えを伝え合うための手立ての工夫

- ・目的を明確にした説明し合う場の設定
（ペア学習・グループ学習・全体交流）
- ・ツール（ホワイトボード、ワークシート、アイテムの宝箱など）の活用

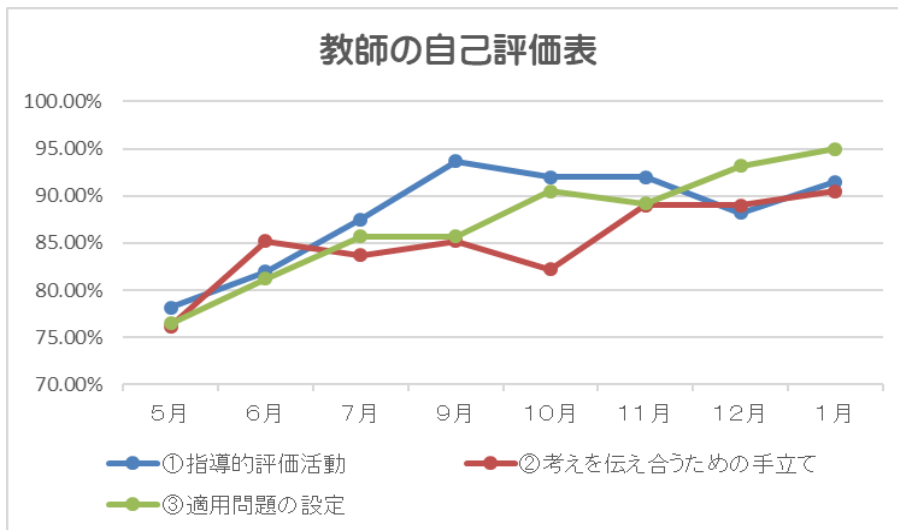
など、授業者が、児童の実態や本時でつけたい力を考慮して設定した。

重点3：わかったを確かめる適用問題の設定

児童のわかったを見取るために適用問題を吟味し、設定した。その際、本時のねらいと一致した適用問題であることを意識することとした。

2 取組の検証

(1) 教師による自己評価『指導力向上の自己評価表』



グラフから、「指導的評価を行うこと」「考えを伝え合う手立てをとること」「適用問題を設定すること」についての教師側の意識が向上しているのが分かる。研究授業だけでなく、日常的に3点について取り組んでいると言える。

(2) 児童アンケート

	1学期末	2学期末
自分の考えを持ち、理由を付けて説明することができる	87%	87%
算数では、前に習ったことや算数の言葉を使って、自分の考えを持っている	90%	87%
話し合いをして、考えを深めることができている	89%	93%

表を見ると、「自分の考えを持ち、理由をつけて説明することができる」「算数では、前にやったことや算数の言葉を使って、自分の考えを持っている」の数値がやや低い。考えを持つことはできる児童が多いが、考えを持つだけでなく「理由をつける」「既習や算数用語を使う」ことについては不安を感じたり自信が無かったりする児童がいることが分かる。

しかし、「話し合いをして、考えを深めることができている」については、向上が見られ、93%の児童が肯定的に捉えている。話し合いを通して、分からなかったことや自信が無かったことが明確になり、児童の「わかった」につながっていると見える。

3 成果と課題

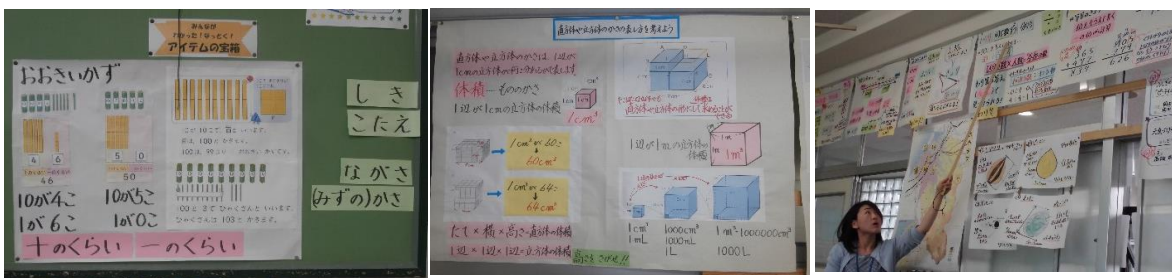
(1) 成果

【重点1】よくわかろうとする子を育成するための指導的評価

昨年度の反省を受け、本校の指導的評価を行う視点を3点に絞ったことで共通理解ができた。授業の中で指導的評価を行っていくことで、3つの視点を意識的に使おうとする児童の姿も増えてきた。

【重点2】考えを伝え合うための手立ての工夫

学校共通で実践している説明アイテムの宝箱は、授業中のキーワードなどを視覚化し、児童と共有するのに有効であった。また、重点1と関連して、児童の発言を価値付けていく手段としても活用することができた。



『アイテムの宝箱』
 黒板横に設けて
 使用する。単元終了
 後は教室横に掲示
 していく。

ホワイトボードの活用についても、児童が考えを構築したり表現したりするのに効果的であった。色を変えたり矢印でつないだりといった工夫や多様な考えを認めながら、ホワイトボードを板書等に位置づけることで、思考を深めていくことができた。

ペア・グループ・全体の使い分けも学年の実態や授業内容に合わせて行うことができた。



ホワイトボードに考えを表す



ペアで考えを伝え合う

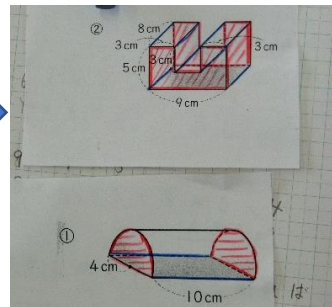
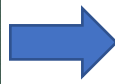


グループで話し合う

【重点3】 わかったを確かめる適用問題の設定

本時で分かったことをアウトプットする方法として適用問題を位置づけることができた。1時間の授業のなかで、児童の「わかった」を確かめるためにどんな適用問題を設定していくか、どんな問題ならば適切に見取ることができるのかを、研究授業を中心に分科研で話し合ってきた。それが、日々の授業作りにも生かされてきている。

また、適用問題を設定するために1時間のタイムマネジメントも意識するようになったことも、重点3の成果だと言える。



本時の学びでの『わかった』を、適用問題で確かめる

(2) 課題

①評価について

適用問題を設定することを重点としたが、どのような問題を設定するかが論点の中心になり、適用問題に取り組んだ児童をどのように評価するかということが明確だとは言えなかった。ゴール設定について、授業者・児童・参観者が共通理解することで、より授業の質を高めていかなければならない。

②金沢型学習スタイル「つかむ」部分について

今年度の研究の重点にはなかった授業の導入部や課題設定について、整理会の中で議論されることがあった。児童が主体的に学ぶための「つかむ」部分の熟考がやや足りなかった感がある。児童が考えたいくなるような仕掛けがあったか、課題設定が教師主導になっていなかったかについて振り返り、授業に生かしていくことで、児童の学習意欲の向上とさらなる理解につなげていく必要がある。

③他教科への還元

算数科としては適用問題を児童のわかったの見取りの場としたが、他教科への波及はあまり意識されていなかった。「全員がわかった」を目指し、算数科を通して研究を数年続けてきたが、研究から得られた成果をもっと他教科へも広げていくことがこれからの課題である。